二次元ぷち文庫

贄の学園

―受け継がれた縛鎖―

三津谷鷹介

表紙イラスト：
どぅーゆーうぉんとぅー

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『贄の学園　ー受け継がれた縛鎖ー』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

贄の学園

―受け継がれた縛鎖―

三津谷鷹介

表紙／どぅーゆーうぉんとぅー

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

瀬島(せじま)ゆかり

文芸部に所属する内気な少女。自身の性格にコンプレックスを持っており、文芸部副部長にして、風紀委員も務めていた美沙に憧れ、慕っている。

永本美沙(ながもとみさ)

当代の学園の裏ルールの生贄だった少女。自分を慕うゆかりを巻き込むまいとしていたが、卒業式後に自分を訪ねてきた際に全てを見られてしまう。

三月　―闇から伸びる鎖―

――卒業式の後って、独特の空虚なざわめきの余韻が残ってる気がする。

人気のなくなった三年生の教室が並ぶ廊下を歩きながら、瀬島（せじま）ゆかりはぼんやりとそんな事を考えていた。

式は午前中で終わり、卒業生と保護者はもうほとんどが下校してしまっている。在校生は式典の後始末があるものの、学校側の計らいでほとんどは明日以降、今日はもうない。それぞれのクラブなどで、最後の追い出しコンパが行われる事も多いからだった。

――もう一回、部室の方に戻ってみようかな。

ゆかりは人を探していた。彼女が所属する文芸部の元副部長、卒業生の永本美沙（ながもとみさ）だ。文芸部でも、簡単な慰労会をやる事になっている。だが、集まった卒業生の中に美沙の顔は見られなかった。彼女たちに美沙の事を尋ねてもはっきりした事を答えられる者は誰もおらず、電話もメールも返事がないとの事だった。

――先輩には、最後にもう一度ちゃんとお祝いとお別れを言いたかったのに。

ゆかりは三つ編みにした二本のおさげの片方を指先でいじりながら考えている。そんなしぐさは、小柄で童顔の彼女を一層子供っぽく見せていた。

私が先輩を探してみますと部室を出たゆかりは、まず下足箱を見て美沙がまだ下校して

いない事を確認した。その後、職員室など、まだ人がいそうな場所を回ってみたのだが彼女の姿はなく、一縷の望みを繋いで訪れた教室も空振りに終わっている。

――やっぱり、どこか遠いところがある人だった――

文芸部副部長にして、風紀委員長も務めていた才媛は、ゆかりの憧れだった。

特徴的なショートヘアに縁取られた大人びた美貌を昂然と上げ、豊かな胸を堂々と張って校則違反の不良生徒たちにも臆せず立ち向かっていく。

気弱な性格がコンプレックスのゆかりにとって、そんな美沙はまるで死せる戦士を導く戦乙女か、民衆のために剣を取る男装の女貴族のように眩しく映っていた。

（……そんなに、自分を卑下するものじゃないわ）

いつだったか、部室で二人きりになった時、ぽつりとそんな事を漏らした彼女を美沙は優しくたしなめた。

（ゆかりは感受性がとても優れているじゃない。あなたは弱さと言うけれど、私から見たらそれは小さな事にも共感できる鋭敏な感性ね。今の自分を否定しないで受け入れてあげれば、いつかきっと強さに変わるわ――）

そこで彼女は、ちょっと悪戯っぽく微笑んで視線を落とし、付け加えた。

（『その部分』だって、これからいくらでも変わるわよ。なんて言ったって、まだ一年生なんだもの）

ゆかりは顔を赤らめ、慌てて胸の前で腕を組んでその視線を遮った。自分の、凹凸に乏しい子供っぽい体型も美沙に憧れている理由の一つだったからだ。

忙しい美沙はあまり部活動に出てくる事はなかったが、どこが気に入ったのかゆかりには何かと目をかけてくれていた。当然、ゆかり自身もそんな強くて優しい先輩へどんどん惹かれていったのだが、同時に彼女にはどこかで一線を引いてそれ以上の他人の立ち入りを拒んでいるようなところがあった。

部でも委員会でも重要なポジションを任され、頼りにされてはいるのだが、男性と付き合うのはもちろん、同性でも親しい友人はいないようだった。それでも孤立しているイメージがなかったのは彼女の人徳というものだろうが、話していてそうした見えない壁の存在を感じるたびに、ゆかりは一抹の寂しさを覚えたものだ。

印象的だった一件がある。

ある秋の日の放課後、ゆかりは一人オレンジに染まった廊下を歩く美沙の後ろ姿を見かけた。委員会で使う資料を取りにでもいくのか、普段使われない校舎の一隅へ向かう彼女を見て、ゆかりは何か手伝える事もあるかと思ってその後を追った。

しかし、先をいく美沙が廊下の角を曲がろうとした瞬間、さっと振り向いて自分を見とがめた時の表情。それは、ほとんど恐怖とも言えるような驚愕（きょうがく）に彩られたものだった。

（……ゆかり！　あなた、こんなところで何をしているの！）

（え、いえ……。そこで先輩を見かけたので、何かお手伝いでもできるかと思って……）
（余計な事は考えなくていいの！　早く部室にいきなさい！）
普段の彼女からは考えられないほどの激しい口調に、ゆかりは怯えつつ、ショックというよりは違和感の方を強く覚えた。しかしそれ以上理由など聞けるはずもなく、その場は黙って引き返す事しかできなかった。
次に会った日には元の優しく凛とした彼女に戻っていたため、結局その件に関してはそこで終わりだったのだが。
――そう。そう言えば、ちょうどこの辺りだったわ。
ふと我に返ると、ゆかりは美沙を追って叱られたその廊下の近くに立っていた。彼女との思い出にふけっているうちに、いつの間にか自然と足が向いてしまったようだ。
――!?
その時、まるで記憶の中の映像をなぞるように、廊下の角を曲がっていくショートカットの少女の姿が視界の隅をかすめた。
憧れの先輩に思い入れるあまりに見た錯覚か人違いかとも思ったが、その人影はやはり美沙だった。少女歌劇の男役のような特徴的なヘアスタイルは見間違えようはずもない。
何かを考えるより先に、ゆかりの足は彼女を追って歩き出していた。
声もかけず、足音を忍ばせて見つからないように後を付けていったのは、あの日の記憶

があったせいか。
セーラー服の後ろ姿は、人気の絶えた廊下をためらいなく進み、やがて普段使われる部分から遠く離れた、資料室などが並ぶ一階の一角にある奥まった部屋に消えた。
――卒業式の後に？　こんなところで？　先輩が？
暮れかかる日に、廊下にはすでに夕闇が忍び寄ってきている。ゆかりは、自分がいつの間にか夢幻の世界に踏み込んでしまったような非現実的な感覚に支配され、ふらふらとその教室の閉ざされた扉に近付いていった。
部屋の中には、ざわめきが満ちていた。幻などではない、生々しく粗野で猥雑な、若い人間の牡たちの、べたつくような欲望に満ちた低い唸り声だった。
（あれぇ～？　美沙チャン、なんで一人で来てんの？）
（おいおい、あんだけちゃんと探しとけって言っといただろうがよ）
言葉の意味はよく分からなかったが、どうやら教室の中には、何人もの、それもたちの悪い不良少年たちが集まっているようだ。
――お礼参り、っていうのがあるって、聞いた事が……。
持ち物検査や服装チェックなどで、美沙は幾度も不良生徒と対決している。煙草が見つかり、停学になった少年もいたはずだ。
誰か教師を呼んでこなければ、とゆかりがきびすを返そうとした瞬間、教室の中から少

女のか細く震える声が聞こえてきて、彼女は動きを止めた。
（お願い……します。こんな、事……。もう、私で、終わりに、してください……）
それは、ゆかりが初めて聞く、許しを乞うような美沙の声だった。
内容よりも、悲哀と恐怖に満ちたその口調に言い知れぬ不安を覚えて、彼女は扉の横にしゃがみこんだ。細く漏れる光の筋に目を当て、教室の中を覗き込む。
外から予想した通り、そこでは幾人もの柄の悪い少年たちと美沙が向かい合っていた。
美沙は胸元を抱きしめるようにして心細げに立ち尽くし、男たちはそれを囲んでにやにやと胸の悪くなるような笑みを浮かべている。
想像と違ったのは、その雰囲気が、すでに力関係の決まった者同士のそれである事だった。強者に憐れみを乞う弱者として震える美沙に、普段の凛とした面影はない。
彼女はおもむろに膝立ちになると、服を脱ぎ出した。ギラつく男たちの視線の中で上着を脱ぎ、スカートを外し、スリップもするりと脱ぎ捨てる。
ゆかりは叫び出しそうになるのを、かろうじてこらえた。
――え？　なに？　なにをしてるの、先輩⁉
ボーイッシュなショートカットの下で、学生離れした豊満なバストとヒップが息づいている。純白の下着姿で奴隷のように服従の姿勢を取ったその様子は、ひどく倒錯的なエロスに満ちていた。

「その代わり……、今日は、私を、気の済むまでめちゃくちゃにしてくれて、構いませんから……」

美沙は膝立ちのまま近くの少年ににじり寄ると、ズボンのジッパーを下ろす。トランクスの間からぼろりと赤黒い芋虫のような肉の塊をまろび出させると、何のためらいもなくそれを艶やかな唇の間に挟みこんだ。

――!!

ゆかりは頭の芯が痺れたようになってその光景を見つめていた。扉の隙間に見える世界が現実のものとは、とてもではないが思えない。

吸い寄せられたように中の様子から目の離せない彼女の肩に、その時不意にぽんと誰かの手が乗せられた。

「……ひっ！」

心臓が止まるかと思うほどのショックと共に小さく声を上げて振り向いたゆかりを、一人の大柄な少年がにたにたと笑いながら見下ろしていた。

女子の中でも小柄な部類に入るゆかりは、扉を開けた少年が軽く背を突いただけであっさりと教室の中ほどまで吹き飛び、倒れ込んだ。

無数の視線が、一斉におさげを結った子供っぽい少女の身体に突き刺さる。

最初に声を上げたのは、下着姿で男たちの欲望に奉仕していた美沙だった。

「……ゆかり！　なんで、なんであなたがこんなところにっ!!」
呟えていたペニスから口を離し、悲鳴のような声を上げる半裸の肢体を見上げながら、恐怖のあまりゆかりは動く事はおろか声を上げる事すらできないでいた。
「へぇ～、この子、お前の知り合い？　ゆかりチャンていうんだ」
「なんだよ、ちゃんと次のを連れてきてんじゃねぇか」
美沙を囲んでいた少年たちが、口々に言いながら傍らに近付いてくる。その目を見て、ゆかりは震え上がった。本能的に、彼らが自分をただ単に欲望を吐き出すための家畜のようなものとしてしか見ていない事を悟ったのだ。
「やめてぇっ！　違う、その子は違いますっ！　帰してあ……んぐぅっ！」
美沙の髪を鷲掴みにした男が、再び自分の猛り立った逸物を彼女の口の中に捻じ込む。ぶじゅっと濁った音が響き、少女の大きく見開かれた瞳に涙が浮かんだ。
仁王立ちになった少年が、そのまま腰を突き出しながら無造作に右手を前後させる。やがて呻いて動きを止めた少年が、逞しい尻をびくりと震わせ、同時に美沙が、
「むぶぅっ！」
半ば白目を剥いて、何とも言えないくぐもった悲鳴を上げた。
しかし、そんな目にあわされながらも、彼女は一切の抵抗をしようとしなかった。んく、こく……と喉を鳴らし、口の中に注がれたものを飲み干そうと苦悶する。

「……んかはぁっ！」

ようやく口を解放された途端、美沙はうずくまって喉を押さえ、激しく喘いで酸素を貪った。蒼白になった顔は涙と涎で汚れ、唇の端からは濁液が筋を引いて垂れている。

凄惨（せいさん）な光景を目の当たりにして、がちがちと歯の根を鳴らすゆかりの傍らに一人の少年がしゃがみこみ、わざとらしい猫なで声で話しかけてきた。

「コイツはな、この学校の裏の伝統って奴なんだよ。俺らが専用のセックス奴隷を飼ってスッキリする、その代わり他の連中にはちょっかい出さねえ。で、奴隷は卒業する時に次のを連れてくる、ってな。今日まではあそこの風紀委員長サマが身体張って俺らのザーメン処理しててくれたんだが、明日からはあんたがその役目ってわけだ」

「せ、せっ……、ど、れ……」

ゆかり自身は男と手を繋いだ経験すらなかったが、小説を読んでいれば性愛のシーンなども少なからずあるのでまったくのおぼこというわけではない。だが、一人の女性をそれだけのために隷属させるなどというのは、想像だにした事がなかった。

「さて、じゃあ早速、これからお世話になる身体に挨拶させてもらうとすっかな！」

「ひ……、むふぐっ！」

床を這って逃げようとする身体が、周囲から伸びてきた幾本もの腕に押さえつけられる。口も掌に塞がれて、無数の節くれだった手が少女の小さな身体をまさぐった。

――!?

青ざめるゆかりに、中年男の分厚い身体が迫ってきた。

「まあいい。今度の便器はどんな味か、俺も試させてもらおうか。そうだな。まず、脱いで、自分であそこを拡げてみせろ。永本は乳も尻もでかくて俺好みだったが、お前はどうも期待できなさそうだが。その分は、せいぜい気合入れて奉仕するんだな」

頼りがいのある屈強な体育教師は、眉も動かさずに冷然と信じられないような卑猥な命令を口にしてきた。普段と変わらないその口調が、かえって本気を感じさせて恐ろしい。

足元の地面が残らず崩れ落ち、奈落の底へ転落していくような絶望に打ちのめされながら、ゆかりは自分の両手が意思とは無関係にゆっくりとブラウスのボタンを外していくのを感じていた。

「嫌です……。ひぐっ、こんなの。も、もう、許してくださいっ……」

保健室のベッドの上、ゆかりは靴下だけを残して着ているものを全て脱ぎ捨て、その状態で自ら脚を左右に大きく拡げて、さらに性器を指で開かされていた。

――声が、足音が聞こえる。壁の向こうの廊下には、まだいっぱい人がいるのに。

非日常の空間ではなく、馴染みの深い普段の学園の領域で娼婦かストリップ女優のようなポーズを強いられる恥辱は、すでにセックス奴隷に堕とされている少女の精神をも苛み、ゆかりは空いた手で顔を覆いながら食いしばった歯の隙間から嗚咽を漏らしていた。

えっちシーン試し読み
ここから
スタート!

しかし、彼女にその姿勢を取る事を命じた体育教師、陣内は哀願にもまったく耳を貸すそぶりを見せなかった。ただじろじろと、小さな手が中指と人差し指で拡げた肉の谷間の内側、鮮やかなピンク色に湿る少女の秘苑がひくひく震えるのを無遠慮に見つめている。

「さんざ連中に突っ込まれたにしては綺麗な色か。まあお前は一年の頃から男と遊び回るタイプでもなかったしな。……男の悦ばせ方はしっかり躾けられているのか？」

陣内は穿いていたジャージを下着ごと足首までずり下ろすと、ゆかりの向かい側のベッドに腰掛けた。黒々として威圧感さえ覚えさせる長大な肉の凶器が、毛深い股間の中心から天を衝いてそそり立っている。

「まずは、しゃぶり方から見せてもらおうか。それから、その穴ぼこは自分でいじって濡らしておけ。俺が挿れる時にキツい思いをせんようにな」

――――……。

傲然と命じる陣内に、ゆかりはもはや嫌悪する意志さえ奪われたようにのろのろとベッドから降り、男の開いた脚の中心にひざまずいた。

肉棒の根元に片手を添え、そしてちらりと上目遣いで男を見やる。

「……ど、どうして先生が、こんな……」

そのままの姿勢で、震えながら彼女はどうしても聞かずにはいられなかった一言を絞り出した。じろりと陣内に見下ろされ、慌てて小さな舌を伸ばして裏筋をちろちろと舐め上

げ始める。
敏感な部分を刺激されて、中年男は軽く眉をひそめた。
「お前は、こんな伝統が、あのバカどもだけの力で維持できていたと思うか？」
「……は、ぷぅ……」
陣内の、独白のような呟きを聞きながら、ゆかりは唇をいっぱいに開いて硬く張った亀頭を上から咥え込んだ。汗臭く、苦しょっぱい独特の強い臭気が喉から鼻に抜けたが、その臭いにはすでに馴染んでしまっている自分が哀しかった。
同時に命じられた通り、空いた右手をおずおずと自分の秘所に伸ばして人差し指と中指を肉の谷間に浅く沈める。
ぷちゅ、と粘ついた音がした。
心はどうあれ、身体は陵辱に備えて準備をしておくよう、調教されてきた結果だった。
「いつ頃から始まった慣習かは知らん。しかし、学園側も全て承知の上でやらせている事だ。……いや、ひょっとしたらこちらから持ちかけた話かもしれんな。一人犠牲にする事で学園内の平和が保てるなら安いものだと。お前のような初心な娘が選ばれたというのはあまり聞かないが、不運だったと思うんだな」
「んっ、ほむっ、ちゅるっ、ぷちゃっ……」
童顔の少女は薔薇色の唇を限界まで開き、頬を膨らませて男の逞しい凶器をしゃぶり立

てる。口内では舌をぬろぬろと動かして竿を撫で回し、快楽の信号を送り続けていた。
「だから、それを人前で大っぴらにやられたら、餌をくれてやってる意味がないんだよ。まあ、あのクズは後できっちり締めておいてやる」
教師の呟く言葉は、もうほとんど耳に入ってきていなかった。
股間では、細い指が膣口の中に潜り込んで休みなく内側の襞を刺激し続け、そこはもう染み出した蜜に塗れて、ぬちゃぬちゃと粘ついた音を立てている。
中の粘膜を引っかきつつ、親指でクリトリスの皮を剥き上げると、それだけで腰が電気に打たれたように震えた。
――あ、また、あたま、しびれて……。
奴隷として犯され始めた当初は苦痛しか感じなかったが、最近では太い肉槍で子宮を突き上げられ、顔に精液を浴びせられていると、脳裏に霞がかかったようにぼうっとなってくるのだった。
その先にある一線を越えると取り返しのつかないところへ堕ちてしまいそうな気がするのだが、疼く身体は自分ではどうしようもないほどの昂(たかぶ)りを覚え込まされつつあった。
「……そろそろ、いいだろう。跨がって、自分で挿れろ」
「……」
陣内の命令にゆかりはペニスから口を離す。しかし、その次の動作には移る事ができず、

うつむいたまま凍りついたように身体を強張らせていた。
「……で、できませんっ。先生と、なんて……。お願いですから、もうこんなこ……ああっ！」
必死の思いで紡ぎ出した言葉は、しかし呆気なく途中で遮られた。
ごつい掌が少女の華奢な二の腕を掴むと、軽々と身体を持ち上げたのだった。
そのまま片手で腰を抱くように支えると、もう一方の手で自身の凶器の位置を定めて先端を粘液にほころびた蕾にあてがう。
「……ひぃっ！」
ゆかりの背すじに怖気が走ったのも一瞬、男は彼女の身体を支える腕から力を抜いた。
じぶちゅ、と粘ついた音が響き、すでに女になっている秘裂は肉竿を飲み込んでいく。
「あ……が……」
分厚い胸板に手を突っ張っても、十分に潤った粘膜は幹に沿って滑り降りる動きを止めず、気がつくとゆかりの小さな蜜壷はすっかり陣内の凶悪な大きさの逸物を受け入れてしまっていた。内臓を下から突き上げるような、圧倒的な存在感が下腹部を占めている。
――また、犯された……。しかも、先生にまで――
哀しいのか、悔しいのか、自分でも分からないまま、涙が一筋流れ落ちた。
「ふん、さすがにまだキツく締まるし、ヒダも浅いか。永本は最後の方はガバガバだった

が、お前はこんな身体だし、どうなるかな」
ベッドに腰掛けての対面座位で、逞しい腕の中にすっぽりとゆかりの未発達の肢体を収め、男は耳元であけすけにその恥ずかしい部分に押し入った感想を囁いた。
身をよじって嫌がる少女の抵抗を楽しむように、ゆっくりと腰をうねらせ始める。
肉棒にぴったりと張り付いた膣壁が擦られ、ごわついた陰毛が敏感な核を周辺ごとちくちくと刺激して、
「あぅ……」
ゆかりは嫌悪からだけではなく身体をくねらせ、声をこぼしながら悶えた。
やみくもに突き込んでくるだけの少年たちとは違い、女の扱いに手馴れた中年男は腰を揺すりながらじらすように少女の身体の性感を呼び覚ましていく。
胎内を押し広げる熱い塊が膣の奥壁をこつこつと突き上げるたびに、彼女の意識に白い火花が散っては消えた。
――いや、なのに。こんなの、おかしい。私が、私じゃ、ないみたい……。
いつの間にかゆかりは全身にしっとりと汗をかき、目を閉じ頬を上気させて秘裂を出入りするペニスの感触に集中している。男のリズムに合わせて腰が躍り始めている事に、本人も気付いているかどうか。
「おっ……、中でキュッと締まったぞ。お前、こんな子供の身体のくせに、もう商売女の

ようなテクニックを覚え始めてるのか。肉便器の素質は十分だな」
揶揄するような陣内の言葉に、イヤイヤと首を振って否定の意を示す。しかしそれは、端から見ると男に示す女の媚態にしか見えなかった。
「ほうびをやるぞ、瀬島。どうせここの味も奴らに覚えさせられてるんだろう？」
男は大きな手でゆかりの尻肉を下から鷲掴みにすると、おもむろに人差し指を伸ばしてその先の小さなすぼまりの中へ押し込んでくる。
「……いっひぃぃぃっ！」
陣内の言う通り、少女のアヌスもレイプの初日に貫通されていた。
ゆかりは歯を食いしばり、額に汗を浮かべて下半身を襲う異様な感覚を堪える。
ペニスと違い、節のある物体は直腸の中でぐにぐにと曲がりながら動き回った。肉の芋虫のようなそれが分泌液をほじりながら出入りを続けるうちに、やがて強張った括約筋も熱を持って緩み始め、ぬちぬちと卑猥な音を立てるようになっていく。
「どうした？　嫌じゃなかったのか？　前も後ろも、もうダラダラ涎を垂らして俺のを締め付けてるぞ？」
陣内が嘲笑う。その言葉通り、徐々に激しくなってきた突き込みに、二人の結合部から流れ出した粘液はベッドのシーツをじっとりと濡らすまでになっていた。
「……ちがう。違いますぅっ！　わた、わたしぃ、そんな……！」

熱く硬いこわばりが未熟な襞をぞりぞりと擦り、薄い内壁一枚を隔てて直腸内で暴れる指とぶつかるたびに子宮に痺れが走る。男の腕に抱きすくめられ、小さく膨らんだ乳首を胸板で押し潰される甘い感覚も重なって、ゆかりの全身の神経は未知の昂揚に追い詰められつつあった。

「っあ！　んあっ！　んあああっ!!」

陣内が秘所へのピストンに集中し、最後の追い込みに入る。膨れ上がった亀頭が子宮口をどすどすと叩いて、そのたびにゆかりの意識は少しずつ浮き上がっていった。

今やはっきりと快楽に身悶えする少女の耳元へ、その時男が息を吹きつける。

「……おい、瀬島。お前、まだ〝アレ〟は来てるか？」

熱に浮かされた脳はその意味を理解するまでわずかに時間を要したが、直後に背すじに冷水を浴びせられたような恐怖が走った。

それは、彼女があえて目をそむけようとしていた現実を突きつける言葉だった。

「永本は確か五回ほど孕んだが……、お前はどうかな。まあ、安心しろ。堕ろす費用くらいは学園の予算から出してやる」

陰惨な未来を予言する言葉を聞きながら、少女の身体は確実に肉悦に狂わされていく。

「やだ、だめ、もう、中はぁぁ、あああ――んっ！」

錯乱したような拒絶の言葉の最後が、甘く蕩けた。

「……あー、もう、中までズルズルになっちまったなぁ」
床に這ったゆかりの尻を抱え、ぐりぐりと抉るように腰を動かしながら少年が言った。
輪姦が始まってから、どれだけの時間が経ったのか、彼女にはもう分からなくなっている。カーテンの隙間からかすかに見える外の景色は、真っ暗になっていた。
その場にいる数十人の男たちに一巡り抱かれた少女の全裸の肢体には、くまなくべとつく生臭い粘液が浴びせられ、尾を引いて垂れていた。
今は獣の姿勢で犯されながらも、腕で身体を支える体力も尽き、虚ろな目で頬を床に押し当てて、尻だけを高く突き上げて男の動きに揺すぶられるままになっている。
少年が肉槍を出入りさせているのは、少女の後ろの穴だった。
かつては指を入れられるのでさえ苦痛だったその小さなすぼまりは、幾度も強引に貫かれた結果、今ではすっかり第二の性器として男の剛直を抵抗もなく飲み込み、それでいて入り口ではきつく締め上げている。
今日一日だけでも直腸には大量の精液が注がれ、ピストン運動と共にびちゃびちゃと汚い音を立てていた。その下の陰裂には、もちろん、それに倍する量の男の熱い子種汁を流し込まれている。
自身が吐き出した蜜とも交じり合って、少女の股間は、べとついた、息の詰まるような

冒頭シーン試し読み
ここからスタート!

性臭を立ち上らせる粘膜の泥沼になっていた。
「あひゅぅ、ひゃい！　い、ひぃ、いひぃ……。おひり、いぃよぉ……」
虚脱したような表情にもかかわらず、ペニスが突き込まれるたびにゆかりの口からは艶やかな喘ぎ声がこぼれ出していた。もうまともにろれつも回っていないが、上気した頬と熱い吐息が少女が感じている悦楽の強さを物語っている。
「……おらっ！　また、出すぞっ！　ゆかりっ！　また、ケツでイけっ!!」
熱い塊がデリケートな直腸粘膜を擦る。その刺激さえも快感に変換され、ゆかりはアヌスから腸液を撒き散らしながらくなくなと夢中で尻を揺すった。
……その時、彼女の耳に、遠く、ガラガラ、と、扉の開く音が聞こえてきた。
しかし、排泄孔からの性感に身悶える彼女は、その程度の事は特に意識もしない。
「はひぃ！　いいでしゅぅ！　ゆかりの、ゆかりのおひりに、じゃーめんだひてぇっ！」
「いくぞっ！　いくぞっ！　くうっ！」
少女の白い尻に指を食い込ませて、男が射精する。ゆかりは条件反射のように絶頂を迎えて、裏返った声を上げながら四肢をぴくぴくと痙攣させた。
「――ふう」
最後の一滴まで絞りきった後、ずるりとペニスを抜きながら、少年が離れる。緩みきった肛門から、ぼたぼたと粘ついた濁液の塊がこぼれ落ちた。

熱い呼気を漏らして余韻の喘ぎを繰り返す奴隷少女の後ろで、その時、言い争うような声が上がる。先程、新しく教室内に入ってきた男が騒いでいるのだった。
(……なんなんだよ、これ！　なんでかのじょが、こんなめにあってるんだよ！)
(おいおい、おちつけよ。さっきのいきっぷり、あんたもみただろ？　こいつは、こういうおんな……ってか、にくべんきなんだよ)
——え？　だれの、こえ……？
ゆかりの意識に、どこかで覚えのあるような声が、届いてきていた。なぜかは知らないが、その声の持ち主は、彼女を見てひどく怒っているようだった。
——おこらないで。ゆかりのおま○こで、きもちよくなって。おしりでも、いいよ。
ゆかりは、まだ高く掲げたままの尻を、その声が聞こえる方に向けた。腿を開き、秘裂と肛門をすっかり露わにして誘うように挿入を待つ姿勢を取る。
(せ、せんせいまで、こんな……)
(まあ、そういうことだ。きにしないで、おまえもつっこんでみたらどうだ——やなぎ)
——やなぎ。柳木、邦弘。
その名が耳に入ってきた途端、ゆかりの精神は一息に現実に引き戻された。
「瀬島、さん。なんで、なんで君が、こんな事……」
なんとか首を後ろにねじ曲げると、呆然(ぼうぜん)とした表情の邦弘がふらふらと近寄ってくるの

が視界に入った。その後ろに、彼との逢瀬を盗み見ていた不良少年がにやにやと笑いながら立っているのに気付いて、彼女は何が起こったか、全てを悟った。

「本当に、君は、この人たちと、いつも……？」

「……！」

とっさに反論しようとして、しかしゆかりは声を出すのを諦めた。近付く邦弘の目に、失望と、怒りと、そして紛れもない欲情の色が浮かんでいる事に気付いたからだった。

――結局、私は、こうなるしかなかったんだ。

後ろでかちゃかちゃと、ベルトの金具を外す音がする。

ゆかりは目を閉じて、右手を下から股の間に伸ばした。おそらくは初めてであろう少年のために、性器を、そして膣口を指で拡げてみせる。すでに粘液塗れのそこは、ぐちゅりと濁った音を立て、糸を引きながらぽっかりと女の秘洞の入り口を示した。

熱く硬く、張り詰めたものがゆかりの中に入ってきた。

今まで男たちに犯されていた時とは違う、甘い期待が胸を満たし、思わず彼女はぎゅっと膣肉を締めてしまう。その途端、

「うぅっ！」

びゅるっ！　と激しい勢いで胎内のペニスの先端から熱いとろみが噴き出した。

「……くそっ！　くそぉぉっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/